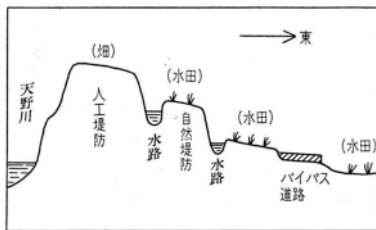


まちの名に 歴史あり

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

ふたえがわ 天野川の東側に、南北に細長く自然堤防と人工堤防がありました。これはもともとあった天野川の自然堤防の上に、人工の堤防を築いたもので、人工堤防の面は畑として、自然堤防は田として利用されていました。

そして堤防の下も水田にするために、水路を設けていたので二重川と言う地名が生まれました。近年では宅地化が進んだため、田畑が消えて、二重川の面影も見られなくなりました。



二重川断面模式図

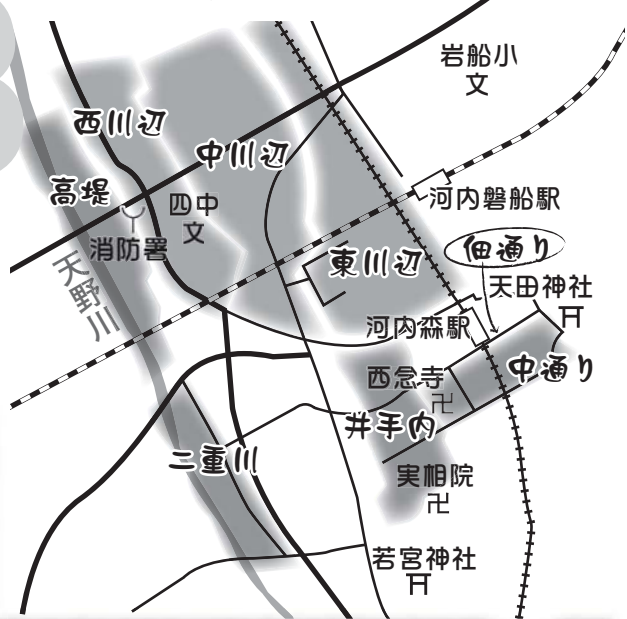
いでのうち 井手内 もとは院田^{いんでん}と書きましたが、呼び方が詰まって「いで」になったと言われており、私市の村の中を南北に通る道路より東側の水田地帯を指します。この辺りは私部と同様に、天皇の后である豊御食炊屋姫命^{とよみけかしきやひめのみこと} (のちの推古天皇) のために働く人たちの土地で、後に「私市」と呼ぶようになったと言われています。



井手内 (昭和 50 年)

獅子窟寺に残る江戸時代の記録によると、鎌倉時代に亀山上皇が自らの病氣平癒祈願のため、獅子窟寺の薬師如来に参詣しようとしたが、険しい山寺であったため、麓に休憩宿舎を造らせました。ここが後に千手寺となり、その寺のための田、つまり亀山院の田という意味で院田という地名が生まれたとされています。

～ 私市 ～



たかづつみ 二重川の北側、学研都市線を越えた付近を高堤と言います。江戸時代、天野川の氾濫に耐えかねた私市の人々は堤防を築いて氾濫を防ぎました。しかし、天野川に流れ込む土砂が多く、川床が高くなるため、それに応じて堤防もさらに高くなっていきました。

にしかわべ なかかわべ ひがしかわべ 西川辺・中川辺・東川辺

現在は天野が原町 2・4・5 丁目の住宅街となっていますが、昔は天野川が氾濫し、水があふれる低い土地でした。ここは天野川の扇状地の末端にあたり、湧き出る水と天野川の水とで、一面が水田地帯でした。

なかどお 中通り 天田宮から西の四角い盆地状の低地を中通りと言います。私市の水田の中心ではないかと考えられています。

そして中通りから、北の通りを佃通りと言います。佃とは、莊園を管理する莊官が持っていた直営田のことで、収穫物を莊官が全て得ることができ、莊官は自らの直営田を増やしていきました。この地域にも佃があったために、佃通りという名前付いたのかもしれませんが。



中通り付近
(昭和 49 年)